

こ た ぶ ん か きょうせい

子ども多文化共生サポーターQ&A



こ た ぶ ん か きょうせい
子ども多文化共生センター

はじめに

兵庫県では、国際化の進展にともないアジア、南米諸国を中心に外国人県民が増加し、その数は、2022（令和4）年12月末で、123,125人となっています。

それにともない、日本語指導が必要な外国人児童生徒の数も増加し、2022（令和4）年5月1日現在、1,337人となっており、子ども多文化共生サポーターの役割がますます重要となっています。

子ども多文化共生サポーター派遣事業は、日本語指導が必要な外国人児童生徒を支援するために、国の緊急雇用創出事業として1999（平成11）年12月から開始し、2005（平成17）年4月からは県単独事業として実施し、今日に至っています。

この事業は、当該外国人児童生徒のコミュニケーションの円滑化、生活や学習の適応、心の安定など、多くの成果を積み上げてきました。

このたび、それらの成果を踏まえ、サポーターの自主的な集まりで、支援方法など支援上の課題解決に向けて話し合っている「サポーターネット」の協力も得ながら、『子ども多文化共生サポーター Q&A』を発行しました。

今日まで積み上げてきた取組の成果を、サポーターの方々をはじめ、外国人児童生徒の支援に関わる多くの皆さんと共有し合い、今後の支援活動に生かしていただきたいと思いますので、ぜひご活用ください。

子ども多文化共生センター所長

もくじ

1 子ども多文化共生サポーターとして

- Q1 外国人児童生徒を支援する場合、大切なのはどんなことですか
- Q2 個人情報の取り扱いについては、どのようになっていますか
- Q3 支援者としての力量を高めるには、どのようにすればよいのですか
- Q4 派遣された学校の先生との連携を深めるには、どのようにすればよいのですか

2 具体的な支援

(1) 学校生活への早期適応

- Q5 学校のきまりをどのように理解させればよいのですか
- Q6 給食時の支援について、どのような配慮が必要ですか
- Q7 「母国へ帰りたい」と言う外国人児童生徒への支援は、どのようにすればよいのですか
- Q8 虐待を受けていることに気づいたときは、どのようにすればよいのですか

(2) 学習支援

- Q9 サポーターが行う学習支援は、どうあるべきですか
- Q10 小学生と中学生の支援には、どのような違いがあるのですか
- Q11 学習意欲のない外国人児童生徒に対して、どのように支援すればよいのですか
- Q12 別室における支援で留意すべきことは、どのようなことですか
- Q13 日本人児童生徒の前で母語を話すことをいやがる外国人児童生徒に、どのように支援すればよいのですか
- Q14 母語や母文化に関する支援で留意すべきことは、どのようなことですか

Q15 れきし ちり がくしゅうしえん こうかてき ほうほう 歴史や地理の学習支援に効果的な方法はありますか

(3) こころ あんてい 心の安定

Q16 がいこくじんじどうせいと しんらいかんけい きず 外国人児童生徒と信頼関係を築くには、どのようなすればよいのですか

Q17 がいこくじんじどうせいと じしん 外国人児童生徒に自信をもたせるには、どのようにすればよいのですか

Q18 がいこくじんじどうせいと こころ あんてい ほか しえん 外国人児童生徒の心の安定を図るための支援は、どのようにすればよいのですか

Q19 じそんかんじょう はぐく 自尊心やアイデンティティを育むには、どのようにすればよいのですか

Q20 がっこう い がいこくじんじどうせいと しえん 学校へ行くことをいやがる外国人児童生徒には、どのような支援をすればよいのですか

(4) つうやく ほんやく 通訳・翻訳

Q21 こうかてき つうやく てん ちゅうい わかりやすい効果的な通訳をするには、どのような点に注意すればよいのですか

Q22 がくねん あ がくしゅうげんご つうやく むずか しえん 学年が上がるにつれて学習言語の通訳が難しくなりますが、どのように支援すればよいのですか

Q23 ほんやく こうりつてき おこな 翻訳を効率的に行うには、どのようにすればよいのですか

Q24 かてい れんらく つうやく ほんやく さい はいりょ てん 家庭への連絡を通訳・翻訳する際に配慮すべき点は、どのようなことですか

1 子ども多文化共生サポーターとして

Q1 外国人児童生徒を支援する場合、大切なのはどんなことですか

A 子ども多文化共生サポーター（以下、「サポーター」という。）は、日本語指導が必要な外国人児童生徒の日本語と母語によるコミュニケーションの円滑化、心の安定、授業中の学習支援、日本と母国の文化の架け橋など、さまざまな支援が求められる重要な仕事です。

そのため、外国人児童生徒をどのように支援していくかを、校長先生や教頭先生、担当の先生（学級担任や教科担当、国際理解教育担当者など）などとよく相談し、連携して適切かつ効果的な支援を行うことが大切です。

このような重要な業務を円滑に進めていくためには、外国人児童生徒やその保護者の思いや願いに耳を傾けるカウンセリングマインドや寄り添う姿勢が大切です。

Q2 個人情報の取り扱いについては、どのようになっていますか

A サポーターは、県の特別職の非常勤職員です。さまざまな相談を受けたり、通訳をしたりするなかで、個人情報を知らることがありますが、職務上の守秘義務があり、知り得た情報を公表したり、漏らしたりしてはならないことになっています。

また、サポーターをやめた後も、これらの情報を公表したり、漏らしたりしてはなりません。

さらに、外国人児童生徒の個人情報だけでなく、職務上知り得た学校のさまざまな情報も個人情報とおなじように、公表したり漏らしたりしてはなりません。

Q3 支援者としての力量を高めるには、どのようにすればよいのですか

A まず外国人児童生徒の理解や効果的な支援のあり方について、外国人児童生徒の担任の先生などとよく話し合い、共通理解を図っておくことが大切です。その上で、「子ども多文化共生サポーター等研修会」や「サポーターネット」などの機会を有効に使い、支援についての知識やスキルの向上に努めるとともに、ネットワークを広げ相談できる人間関係をつくるのが大切です。

また、「日本語教師養成講座420時間」(文化庁指針)の講習や兵庫県国際交流協会主催の「外国人児童・生徒への日本語学習支援ボランティア養成講座」など、関係機関・団体が実施する研修会などに自主的に参加することも、支援者としての力量を高めるためのよい機会となります。

Q4 派遣された学校の先生との連携を深めるには、どのようにすればよいのですか

A 支援時に気づいたことや気になることがあれば、状況改善に向けた適切な対応のためにも、すぐに担任や担当の先生に伝えていくことが大切です。

どんな小さいことでも、わからないことがあれば先生にたずねるなど、積極的にコミュニケーションを図っていきましょう。そして学校の中でお互いが信頼できる人間関係をつくっていきましょう。

また、一人一人の子どもに対して情報交換や情報共有ができるように、子どもに関する情報や支援内容をノートやファイルに記録するとともに、担任の先生や担当の先生とよく話し合い、外国人児童生徒が自信をもって意欲的な学校生活を送れるよう、協力・支援することが大切です。

2 具体的な支援場面



(1) 学校生活への早期適応

Q5 学校のきまりをどのように理解させればよいのですか

A 外国人児童生徒への指導は、学校の先生の仕事です。サポーターとしては、まず学校や先生の指導方針を知り、サポーター自身がその学校のきまりを理解し、指導を補助することが大切です。

たとえば、「学校へピアスをしてきてはいけない」「携帯電話を持ってきてはいけない」など、まずサポーターが学校のきまりの理由をよく理解していないとうまく説明できず、相手を納得させることはできません。

そのうえで担任の先生などと連携しながら、学校のきまりを外国人児童生徒やその保護者にていねいに説明していきましょう。

そのときは、きまりだからとおしつけるのではなく、その背後にある考え方やねらい・目的などをていねいに説明し理解を求めることが大切です。

Q6 給食時の支援について、どのような配慮が必要ですか

A 児童生徒にとって、給食の時間は、学校の仲間や先生と和やかで楽しく会食し、気分転換を図ったり、人間関係を豊かにしたりしながら、学校生活に対する意欲や活力を生み出す時間です。

サポーターとしては、この時間に食物の名前を母語と日本語で確認し、語彙を増やしていくように働きかけたり、自分から言葉をかけて、積極的に友だちづくりに努めるよう支援することが大切です。

また、宗教上食べたり飲んだりすることができないものについて、学校は保護者からの連絡を受けて配慮することになりますが、そうしたことを担任の先生とよく確認しておく必要があります。

Q7 「母国へ帰りたい」と言う外国人児童生徒への支援は、どのようにすればよいのですか

A そのような相談を受けたときは、まず、担任の先生へ情報提供しましょう。そしてなぜ帰りたいと言っているのか、児童生徒の思いや考えを寄り添う気持ちでじっくりと聞き、担任の先生に伝えましょう。

また、サポーター自身の母国や海外での生活体験やそこで得たことなどについて、悩んでいる外国人児童生徒に話すことも、心の安定を図る上でたいへん効果的です。

どの国で生活していても、社会で生きていく力を身につけるよう学校で積極的に学ぶことの重要性や、多くの友だちを作って楽しく有意義な学校生活にすることの大切さなどについて触れ、前向きな生活態度につながるよう支援していきましょう。

Q8 虐待を受けていることに気づいたときは、どのようにすればよいのですか

A サポーターが、児童が虐待を受けていることに気づいた場合は、すみやかに担任や教頭先生などに連絡しなければなりません。

学校から依頼を受けて、外国人児童生徒の保護者の思いや生活状況などを聞き取ることが必要になる場合もあります。そのときは、ていねいに聞き、もれることなく学校の先生に伝えることが大切です。

日本語がうまく話せない外国人児童生徒や保護者は相談相手もなく、困っている場合があります。サポーターとして外国人児童生徒のすこやかな成長を見守るためにも、変わった様子や悩んでいる様子に気づいたとき、相談を受けたときは、必ず学校の先生に連絡しましょう。

(2) 学習支援

Q9 サポーターが行う学習支援は、どうあるべきですか

A サポーターは、学校の指導方針に従い、日本語学習と教科学習などについて学級担任や教科担当とよく連携しながら、個別の支援や指導の補助を行います。

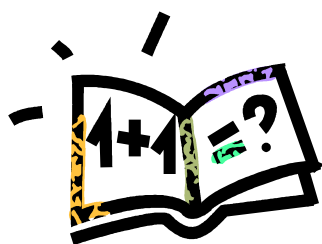
学習言語を日本語と母語で十分理解するには、教科書や辞書や用語集を活用して、事前に調べておくと役に立ちます。児童生徒がわからないというのは、日本語理解ができていないからなのか、習っていないからわからないのか、それとも、学習の内容そのものが理解できないからなのかを判断し、具体物で示したり、わかりやすい表現に言い換えたりして理解をうながしていくことが大切です。

また、日本に来て間もない外国人児童生徒には、母国の教科書を使って母語で説明すると理解が早いことがあります。母国の教科書（韓国、中国、ベトナム、インドネシア、フィリピン、ペルー、ブラジルなど）は、子ども多文化共生センターで閲覧したり、貸し出したりすることができます。

以下のホームページでは日本語指導にかかる資料及び小学校・中学校の教科書、参考書、ワークブックなどを見ることができますので参考になります。

※ 財団法人 兵庫県国際交流協会 「日本語教育推進室教材リスト」

<http://www.hyogo-ip.or.jp/pdf/usr/default/c91-q-g7aC-3.pdf>



Q10 小学生と中学生の支援には、どのような違いがあるのですか

A 小学生、特に低学年の場合は、学習の導入に遊びの要素を入れるなど、楽しみながら学ぶ工夫をしたり、具体物や半具体物を使ったりして理解をうながすと効果的です。中学生は、高校受験をひかえ、教科書の学習内容の理解と学習言語の習得に重点をおいて支援することが求められます。中学生になると、自分の得意、不得意がわかってきますし、進路の選択もありますので、生徒や保護者、担任の先生などと相談し、希望を実現するためにはどうしたらよいかについて、よく確認していくことも大切です。

Q11 学習意欲のない外国人児童生徒に対して、どのように支援すればよいのですか

A まずは担任の先生とよく相談し、学校の指導方針に従って支援を行うことが大切です。

「分かった!」「できた!」などの成功体験の積み重ねが学習意欲を高め、前向きな生活態度につながります。

具体的な支援方法として、子どもの状況に応じて励ましの言葉をかけたり、得意分野を伸ばすように働きかけたり、段階的に学習を進めてできたらほめたりするなど、やる気や自信を持たせていくことが大切です。また、日本の教科書だけでなく、母国の教科書も使って、理解をうながす方法もあります。

さらに、進路の説明と関連づけて、日本で安定した仕事に就くためには、運転免許などの各種免許・資格の取得が必要であり、そのために日本語の力が不可欠であることを理解させることも意欲につながります。

Q12 別室における支援で留意すべきことは、どのようなことですか

A 外国人児童生徒を別室で支援をする場合も、担任の先生や教科担当の先生と支援内容やその方法について、十分確認を行った上で、支援を行うことが基本です。

別室では、当該児童生徒の負担が大きくなり、だまってしまう場面が多くなりがちです。そうならないために、外国人児童生徒の興味・関心を引き出したり、遊びの要素を取り入れたりするなど、指導者の意図をサポートがよく理解し、児童生徒が自分から話そうとする雰囲気を作り出すように努めることが大切です。

また、在籍学級（同室）における支援が基本であるとの前提のもと、別室における目的やねらいを明確にして支援を行うことが大切です。

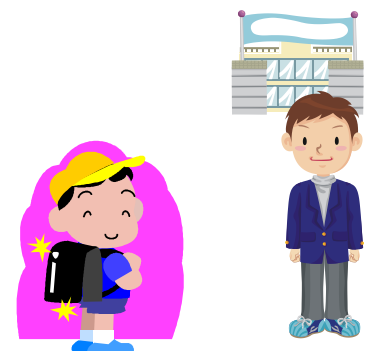
Q13 日本人児童生徒の前で母語を話すことをいやがる外国人児童生徒に、どのように支援すればよいのですか

A 母語を話しながらないときは、無理に話させることはありません。母語がいやなのではなく、まわりを意識していたり、恥ずかしさが勝っていたりするからです。

そのようなときは、サポーターとして、母国や母語が話せることのすばらしさを伝え、外国人児童生徒に勇気や自信をつけさせていくとよいでしょう。

担任の先生と連携し、クラス全体で外国人児童生徒の母国の文化や言語を学習し、外国人児童生徒のことをまわりのみんなで理解することが大切です。

また、多くの先生や児童生徒に、「二つの国の言葉を話せるって、すばらしいね。」など、肯定的な言葉や自信に結びつく言葉をかけてもらえるように働きかけていくことが、母語が話しやすい環境づくりにつながります。



Q14 母語や母文化に関する支援で留意すべきことは、どのようなことで すか

A 日本に来て間もない児童生徒に、母語に関する学習支援を行うことは、学習言語を
理解するための方法として有効です。また、母文化に関する支援は、外国人児童生徒の
アイデンティティの確立や保持のために必要なことです。

サポーターとして大切なことは、当該児童生徒の生活経験や気持ちなどの実態を踏
まえながら、母語や母文化のすばらしさを伝えていくことです。

子ども多文化共生センターでは、民族衣装や民族楽器・玩具、各国の教科書などの
資料を貸し出していますので、母文化・母語に関する支援などに活用できます。

Q15 歴史や地理の学習支援に効果的な方法はありますか

A 歴史や地理の学習では、数学・理科などとは違って、日本独特の内容や表現が多く、
翻訳したり、うまく伝えたりすることが難しい場面が多くあります。

辞書を使って学習言語の意味をていねいに調べたり、具体物や絵、写真などを使っ
てイメージといっしょに理解させたりすることが必要となります。

あるベテランのサポーターは、教科の担当と相談して、歴史学習の支援にマンガを
活用しているそうです。教科書は文字情報が多いので、外国人児童生徒には理解が難
しいのですが、マンガだとルビ付きの文字とともに具体的なイメージとして理解する
ことができるからということです。マンガの内容や質を吟味したうえで、補助的な資料
として活用することは有効です。



(3) 心の安定

Q16 外国人児童生徒と信頼関係を築くためには、どのようにすればよいのですか

- A 信頼関係を築くためには、外国人児童生徒にあたたかく声をかけたり、よく話したり、ふれあいや交流を深めたりして、お互いのことを理解し合うことが大切です。
- じっくりと時間をかけて、外国人児童生徒の性格や心の状態、家庭状況などを的確に把握することが大切です。
- 相手に心を開いてもらうためには、まず自分から心を開くことが重要です。たとえば、自分もかつては言葉がわからずに苦労したことなどを語り、同じように悩んだり苦労したりしたことを伝えて、心を通わせるのも一つの方法です。
- 外国人児童生徒との信頼があってこそ、はじめて効果的な支援ができるのです。

Q17 外国人児童生徒に自信をもたせるには、どのようにすればよいのですか

- A まず外国人児童生徒に目標をもたせ、努力してできたらほめて、「できた！」「わかった！」という経験を一つ一つ積み重ねて自信をつけさせ、何ごとにも意欲的に取り組むよう支援することが大切です。
- たとえば、漢字の小テストでまちがった漢字を練習させ、再テストで合格したらその努力をほめて、自分で次の目標を立てるよう意識づけたり、言葉を覚えることが得意でない子には、体育・音楽・図工（美術・技術）といった教科などで得意な分野をつくることで自信をもたせたりすることができます。
- このように得意なことからはじめて、当該児童生徒が活躍する場面や、まわりみんなから認められる場面づくりをすすめるよう担任や教科の担当に働きかけるなど、学校生活の中で、一日も早く自信がもてるように支援することが大切です。

Q18 外国人児童生徒の心の安定を図るための支援は、どのようにすればよいのですか

A 日本に来たばかりの外国人児童生徒は、文化や習慣の異なる日本での学校生活に、さまざまな不安やストレスを感じ、心がたいへん不安定になっていることがあります。心の安定を図るためには、ストレスの原因となるもの見つけ、一つずつ取り除いていくことが必要です。

このような中、サポーターとしては一方的に支援するのではなく、カウンセリングマインドで、じっくりと外国人児童生徒の話聞くことが大切です。母国の学校の様子やそこでの学習のことなど、自由な語りを通して心を落ち着かせたり、困っていることを聞いてその解決方法について一緒に考えたりすることが、外国人児童生徒に安心感や安堵感をもたせることにつながります。

Q19 自尊心やアイデンティティを育むには、どのようにすればよいのですか

A 自分がかげがえのない存在であり、まわりからも認められていることを実感する体験を通して、自分が好きになり、自分のことを大切に思えるような自尊心が高まっています。

また、アイデンティティの形成は、小学校高学年から中学校にすすむにつれて大きな課題となってきます。自分のルーツを知り、ありのままの自分を大切にすることができるように支援することが、アイデンティティを高めるきっかけとなります。

先生と協力して、外国人児童生徒の母語や母文化、母国での生活習慣などについて、発表や交流活動を行う場面や機会をつくることが大切です。それはまわりの児童生徒にとっても、多様な文化や価値観について理解するよい機会となります。

Q20 ^{がっこう} ^い 学校へ行くことをいやがる^{がいこくじんじどうせいと} 外国人児童生徒には、どのような^{しえん} 支援
をすればよいのですか

A ^{がいこくじんじどうせいと} ^{とうこう} 外国人児童生徒の登校をうながす^{しどう} 指導は、^{せんせい} 先生にまかせましょう。^{がっこう} ^{つうやく} 学校から通訳を
^{いらい} 依頼されることがあるかもしれませんが、そのときは^{せんせい} 先生と^{がいこくじんじどう} 外国人児童
^{せいと} ^{ほごしゃ} ^{はなし} ^き ^{なに} 生徒や保護者の話をよく聞き、何が^{がっこう} ^い いやで学校へ行きたくないのか、^{しんばい} どんな心配や
^{ふあん} 不安があるのかなど、^{せんせい} ^{つた} ありのままを先生に伝えましょう。

^い ^{げんいん} ^と ^{のぞ} 行きたくないという原因をつきとめ、それを取り除いていくための^{がっこう} ^{とりくみ} 学校の取組にサ
^{きょうりよく} ^{しえん} ^{たいせつ} ポーターとして協力・支援することが大切です。



(4) 通訳・翻訳

Q21 わかりやすい効果的な通訳をするには、どのような点に注意すればよいのですか

- A 事前に学習内容を理解しておく、より効果的な通訳ができます。そこで、教科書や授業プリントなどの資料を事前に見ておく、一語一語通訳するより要点を抜き出して通訳するなど、その場の状況に応じた対応が求められます。
- 外国人児童生徒が「学習の内容がわからない」「先生の質問の意味がわからない」などと言うときは、わかりやすい表現で通訳するとともに、担当の先生などに連絡し、相談の上で学習支援を行いましょう。あわせて、学習のキーポイントとなる大事な用語については、ただ通訳するだけでなく、日本語で読み書きができ意味もつかめるように工夫しながら支援すると学習効果が高まります。
- 通訳する際は、生活習慣や文化などの違いをふまえることが大切となります。

Q22 学年が上がるにつれて学習言語の通訳が難しくなりますが、どのように支援すればよいのですか

- A 通訳する学習言語に関する情報をあらかじめ得ておくことが大切です。中学校の教科に出てくる用語の翻訳・通訳に関しては、『学校教育におけるJSLカリキュラム中学校編』（文部科学省 平成19年3月）が参考になります。
- この資料では、社会・数学・理科の教科用語を、ポルトガル語、中国語、スペイン語、フィリピン語、韓国・朝鮮語、中国語、ベトナム語、英語に翻訳してあります。
- 下記のホームページで見ることができます。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm

また、この資料は子ども多文化共生センターにもあります。

Q23 翻訳を効率的に行うには、どのようにすればよいのですか

A すでに翻訳されている文例や翻訳例を参考にと効率的に翻訳することができます。次に示すホームページなどで文例や翻訳例に関する情報を得ることができます。

※ 子ども多文化共生センター

「就学支援ガイドブック」(11カ国語対訳付き)

「外国人児童生徒受入初期対応ガイドブック」など

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~mc-center/>

※ 財団法人 兵庫県国際交流協会 「外国人児童のための翻訳教材」

<http://www.hyogo-ip.or.jp/info/support/support08/kyouzai/>

※ 多言語・学校プロジェクト (文書検索/予定表作成ツール)

<http://www.tagengo-gakko.jp/>

Q24 家庭への連絡を通訳・翻訳する際に配慮すべき点は、どのようなことですか

A 学校制度や文化、生活習慣の違いをふまえて、外国人児童生徒や保護者に具体的にわかりやすく伝える必要があります。

たとえば、遠足や運動会など、母国にはない学校行事の連絡では、大切な集合時間や服装、持ち物の説明部分にマーカーで印をつけたり、違う表現を使って解説を加えたりすると正しく伝えることができます。

例えば、あるサポーターは、書いてあることだけを翻訳するのではなく、「保護者はこの表現で理解できるのだろうか？」と相手の立場に立ってみて翻訳したり、文章だけでなく実物や写真など入れたりして、わかりやすく伝える工夫をしています。

また、コミュニケーションの難しさについては、次のような例があります。

遠足に関しての連絡したとき、リュックサックを「背中に背負うカバン」と説明し

たところ、当日外国人児童生徒はランドセルにお弁当を入れて登校してきました。そのことが原因で友だちにならかわれ、不登校になりかけたというのです。リュックサックを絵や写真などを使ったり、いろいろな表現で説明したりしていれば、このようなことをさけられたのです。



こ たぶん かきょうせい
子ども多文化共生サポーターQ & A

2010（平成22）年3月印刷

2010（平成22）年3月発行

編集・発行 兵庫県教育委員会
子ども多文化共生センター
〒656-0031 芦屋市新浜町1-2
県立国際高等学校内
TEL 0797-35-4537 FAX 0797-35-4538
E-mail mc-center@hyogo-c.ed.jp